

十月三日

午前中、原稿書き。仲々グングンというわけにはゆかぬがそれなりにやっている。十二時過研究室。良い秋日和だ。技術と歴史研究会の月例テーマを難波さんは考えているだろうが最先端のテクノロジーがこれ迄の建築の歴史とは違う目的の為に使われている事例等を探してゆくのはどうだろうか。十三時TVプロダクション・ルーカス来室。長期にわたった取材の成果は十一月三日に放映となった。コンバージョン関係来客。遅い昼食を甲州屋で。学生時代からの附合いだった甲州屋ソバ店が突然十月四日閉店との事。昼食はどうなるのか。甲州屋のオヤジの見舞いに行くべきか。十五時設計製図。十九時前修了。二件打ち合わせ二十二時修了。空腹の極み。

十月四日

十時指扇朝山邸現場。群馬の森田兼次、大工、配島工業スタッフと打ち合わせ。その後前橋へ。森田左官工業にて伊豆の長八美術館のお色直し打ち合わせ等。夕方、ルーカスの車で世田谷まで送ってもらう。朝山邸の仕上げは大変そうだ。森田さん、大工さんの力に頼るしかない。無理を承知で始めた事だが、無理を通して、実現するには異常な努力が必要なのだ。小さな現場で陣頭指揮も辛いけれど仕方ないだろう。森田のオヤジにも、アト二つ位、良い仕事を作ってあげなければ。職人はやっぱり良い仕事が

あつて、生き生きするからね。

前日本左官業組合連合会長の森田兼次、会長当時はまだスレスレに日本の職人達は元気であつたが、今はどうか、すでに私も良くは実体を知らぬ。

十月五日 日曜日

午後遅く研究室。図面チェック、書庫スケッチ。四名程在室。休日の大学は本当に良い環境で仕事がかどる。十七時四十五分発。十八時過六本木国際文化会館へ。栄久庵憲司さん、伊藤隆道さん等と、日本フィンランドデザイン協会、ウエルカム・レセプション。OZONE館長若宮さん。ソタマ・ヘルシンキ芸術工芸大学長等フィンランド・アーティスト等三〇名程を迎えて、レセプション。二〇時過一足お先に失礼する。この会や数々の催し、展覧会はフィンランド側のビジネスにはメリットがあるだろうが、日本側にどんな具体的な利があるのか、不明なところがある。そこを少しばかり明確にしないと、企業からのこれ以上の協賛は得られないだろう。長く続けてゆくには少し組織の改良が必要であらう。

十月六日

曇天の朝。昨夜は家族会議で世田谷村の改修について話し合う予定であつたが、延期。主に未完の洗面所、風呂場、そして三階寝室について考えなければ。オフク口が本格的に村に移住してくる為に、彼女の気に入らないところを直さねばならないのだ。仏壇のスペースも作らなくては。人が一人動く家は変わる。十時指扇、朝山邸現場。諏訪の角大製材所のオヤジと若い大工、そして配島工業の七三才の大工と若い大工、土工事の間人が現場へ集

まる。十八時前まで現場で立ち通し。屋根工事をみたり、プレス入レを見たり。しかし職人はよく働く。一日でかなりの仕事を仕上げて、諏訪の二人は帰った。十九時過研究室に戻る。若干の打ち合わせも集中できず。二十二時過世田谷村に戻る。「Memo」の原稿、セルフビルド書く。今回はキルティプールについて、3Dフェイズ人工衛星の事から入った。再び途中、遅い夕食をとり、今朝の家族会議の続き。家族全員より再び吊し上げられる。深夜二時過、ようやく原稿書き上げる。

十月七日

昨夜は遅く迄原稿書いて、頭が疲れて良く眠れなかった。七時半起床。午前中はボーツとして過ごす。十二時半過内閣府。十四時終了。終了後麹町のホテルのレストランで遅い昼食と打合わせ。十六時前研究室に戻る。十七時配島工業来室。十七時四〇分。河野鉄工来室。

沖繩の計画を具体的にディテール迄つめなくてはならぬ段階になつてきた。上海ワークシヨップとの関係も整合させ得る可能性がある。生命と環境、ライフスタイルを総合的に提示するプロジェクトにする。正念場の一つだな。夜、原稿書き。早く書き終えて、スケッチで遊びたい。とりあえず十二時四〇分、一年遅れの原稿を書き終える。木材について書いたが、苦しんだ。

十月八日

七時起床。昨夜の原稿を読み直す。満足のゆくものではないがマア、良いか。八時四十分京王プラザホテル、ロビー。総勢十五名程の日フィン協会員を連れて、一日の建築ツアー。午前中は小金井の江戸東京建物園。早稲田の歴史研の卒業生の学芸員米山君

がキチンと説明してくれた。私も初めての訪問で為になった。昼食は園内のレストランで弁当。午後原宿へ。原宿スタイルのビルの数々を見学。皆、プラダに関心があるようだ。私も今回、室内の「目ざわりデザイン」で、書こうと考えているので取材を兼ねて見学。その後、松屋デパートのデザイン・コミッティの六〇〇回記念展へ。伊藤隆道先生出迎え。十七時迄。銀座ライオン・ビアホールで夕食。新宿へ戻る。京王プラザホテル帰着二〇時三十分。只今二〇時五〇分新宿発京王線車中に居る。

今日の建築ツアーは良くオーガナイズされていた。しかし今、話題の原宿スタイルの建築は全く感心できない。建築家は心性として、いつも時代と寝るのが世の常であるが、それを解つた上でも、この表れ方は極めて危ない。

建築家は皆、多分、自分から欲してこの潮流に身を投じているのだが、全て失敗している。多分、失敗している事も自覚できていないのであろう。歴史感覚が完全に欠如している。帝冠様式、八鉦一字の考えは誰でも今はNOと言う。しかしこの原宿スタイルがグローバリズムの単純な現れだとは誰も言わぬ。グローバリズムとすれば問題はまだ曖昧のままに据えていられる。

しかし、このスタイルはキャピタリズムの表象だと、明快に、あまりにも明快に示現されている事実を介すれば、原宿でブランドメイキングの消費的片棒かつきをしている建築家は全てある種の資本市場の世界的拡張の戦争加担者なのである。その辺りを、はっきり指摘したいと思う。